＊東大附属調査結果概要

東京大学教育学部附属中等教育学校調査結果概要について

報告者　センター研究員・東京大学教育学部附属中等教育学校　鈴　木　一　史

昨年度，本校（東京大学教育学部附属中等教育学校）の生徒を対象に，学習や家庭環境，そして卒業研究の分析・追跡調査などが行われた。その詳細や結果分析は，村山，藤田，高橋のレポートに譲るとして，本稿では附属学校の教員として，生徒と接しているものとして，その調査結果に対してのコメントを述べたい。

藤田レポートでは本校前期課程を対象に関東地区K市と同様の調査を行い比較されている。それによれば，学年の相違として，１年生は安定しておらず，２年生は意欲的で充実し，３年生は安定するが能動的でなくなるという報告がなされている。この調査は経年調査ではないため，学年の「カラー」が出ていると感じられた。毎年同じように試験をし，同じような行事をしているにもかかわらず，年毎に学年の雰囲気は様々である。これは担任団の個性によるものなのか，ある集団気質が特定の条件によって育まれるのか，興味あるところである。この異質な学年団が徐々に年を重ねていくと，学校全体の雰囲気も少しずつ変化しているのだろう。学校全体が生き物のようなダイナミックな変動を生きていると思わされる。

次に注目すべきは，保護者にも同じような調査を行い，その回答と生徒の回答に「ずれ」がなかったという報告である。本校は１学年，３クラスずつしかない小さな学校であり，生徒･保護者･教員の距離が近いと言われている。その三者が集まって一つのことについて話し合う三者協議会も発足している。そのような体制が，この「ずれ」を無くしているのではないだろうか。

K市との比較で，本校の生徒のほうがテレビに向かう時間が少ないという結果について，「成績との関連を見なければ，一概に解釈はできない」と藤田氏も指摘しているが，本校の前期生徒は電車等で通学する生徒も多く，おそらく公立中学生より通学時間が長い。このことを考えるに，効率のよい学習方法を身につける必要があると痛感した。

卒業研究についての調査報告について，教員が漠然と感じていた印象について，各教科との相関や追跡調査などのデータが出されたことで霧が晴れた感がある。教科間との相関関係よりも科目と卒研の関係が低いことや，特定の教科と強い相関があるわけではないことなど，示唆に富む。これは自分の興味関心のあるテーマを選ぶため，世界史の好きな生徒は歴史関係のテーマを，理科の好きな生徒は実験しながら進めていくテーマを設定するということも関係しているのではないだろうか。

高橋レポートの縦断調査に見られるように，テーマ設定が卒研の成否の鍵を握ってもいる。これは「満足度」として数値化されているが，「満足度が高い生徒はテーマ設定時からテーマがはっきりしており，低い生徒はテーマがなかなか見出せない」との報告は興味深い。昨年，本校の卒業研究をまとめて「生徒が変わる卒業研究」として出版した。この本の中でも，テーマ設定の重要性を各教員が述べているのであるが，そのことが調査結果としてもデータとして示されたことは心強い。

さらに，事例研究として，特定の生徒の数年に亘る調査により，個々の生徒の内面的変化が捉えられる。そこにはテーマ設定時の揺らぎや教員と関係，更には卒研と進路の密接な繋がりまで報告されている。卒研は教員一人に数人の生徒が付くという形態をとっているので，他の教員の指導や，自分についた生徒以外の生徒の内面的葛藤や成長などは見られない。その点で，このレポートにより抽象化されてはいるが，見えなかった生徒の内面を知らしめていると言える。また，個人的なことではあるが，高橋レポートで分析された生徒たちを私が担任していたこともあり，抽象化された中にも個人個人の顔が浮かび上がってくる。

ただ，成績との相関について，本校からの成績データの提示が不十分だったこともあり，細かく見られなかったのではないか。本校は「附属」という位置づけではあるが，なかなか研究的フィールドワークにならない。日々ダイナミックな動きの中で，生徒と接していると，抽象化することが疎かになってしまいがちである。しかし，今回のような様々な調査により，本校の生徒たちの「実態」が数値化され比較され抽象化される中で，我々

教員の日々の実践に対して大きな示唆を与えられることは間違いない。今後，これらの調査が，更に深化して，我々教員の日々の活動に勇気を与えてくれることを願うとともに，我々自身も「実態」把握のための調査を企画し協働して生徒をのばしていけたらと切望する。